

田村泰次郎研究（一）：「肉体の門」自筆原稿の 検討

著者	尾西 康充
雑誌名	三重大学日本語学文学
巻	16
ページ	77-84
発行年	2005-06-26
URL	http://hdl.handle.net/10076/6627

田村泰次郎研究(一)

—「肉体の門」自筆原稿の検討—

尾西康充

序

戦後の日本社会に一大旋風を巻き起こした「肉体の門」は、田村泰次郎が「肉体の解放こそ人間の解放である」というテーマをもとに描いた小説である。このテーマは泰次郎が経験した五年三ヶ月に及ぶ中国大陸での軍隊生活から得られたもので、たとえどんな崇高な思想であっても人間を虐げた挙げ句の果てには死に至らしめるようなものは不要であるという確信に由来していた。泰次郎は戦前から新進作家として注目されてはいたが、この頃はまだ戦友の血に染まった軍衣を脱いだばかりで、帰国して真っ先に足を運んだ四日市の母の許でも(戦場の記憶)を共有できない復員兵の疎外感と孤独感を噛みしめていた。ちなみに一九一一年生まれの泰次郎は、復員当時三四歳であった。故郷を後にして上京した泰次郎に助力を惜しまなかったのは、旧制富田中学校そして早稲田の先輩作家である丹羽文雄であっ

た。丹羽はすでに、宣撫班の兵士が中国共産党軍女性俘虜との間で繰り広げた愛憎劇を描いた「肉体の悪魔」を読んで好印象を持つており、有望な作家として泰次郎を「群像」編集部の人田稲男に紹介した。泰次郎が薦めに応じて持ち込んだ原稿を編集部全員が読んで掲載を決め、「群像」(一九四七年三月)に発表されたのが「肉体の門」であった。雑誌発表時から好評であった「肉体の門」は五月に単行本として風雪社から出版され、売り上げが最終的に一二〇万部を超える大ヒット作となった。さらに「肉体の門」が原作になった舞台が劇団空気座によって帝都座五階劇場で上演された。半裸の私娼がリンチを受けて天井の鉄骨に宙吊りにされるというラストシーンが観客の話題を呼び、〇〇〇回以上続演されるというロングランの記録を樹立した。米軍の爆撃によって一面廢墟となった都市に漂っていたニヒリズムと、戦時統制が解除されてうごめき始めた大衆の欲動とが作品には巧みに投影され、戦後の世相を反映した記念

碑的な小説として高く評価されてきた。戦後作家独特の直観によって時代の空気が的確に読みとられた結果、泰次郎の「肉体文学」が創造されたのであった。

一

現在「肉体の門」自筆原稿は四日市市立図書館に保存されている。泰次郎の父左衛士が初代校長を務め、彼の母校でもあった三重県立四日市高等学校（旧制県立富田中学）の創立百周年記念展が一九九八年に四日市市立博物館で企画された際、展示資料の調査と収集を行っていた泰昌弘学芸員が美好氏の自宅で「肉体の悪魔」「肉体の門」の自筆原稿を発見した。当時それらは保存状態が悪く、紙質が劣化して破損した部分もあったが、泰氏の尽力によって修復され今は同博物館に保管されている。

「肉体の門」自筆原稿は四〇〇字詰原稿用紙（縦二〇字×横二〇行）五六枚、使用された用紙は三種類である。推敲のための書き込みが夥しく見られるが、組み版を指示する編集記号が一切ないことから、浄書稿ではなく草稿であることが分かる。おそらく泰次郎は自分にとって出世作となった「肉体文学」二作品の草稿を手許に残しておいたのだろう。

ところで「肉体の門」自筆原稿を見てまず気づくのは「肉体の悪魔」同様、推敲の過程でタイトルが何度も修正されている

ことである。最初のページの冒頭、左から「若い生態圏」、「未成年」、「人肉（片）」と書き直され、どれも二重線と消去されて最終的にタイトルが「肉体の門」と決められている。タイトルは作品の内容を象徴するばかりではなく内容が読まれる前に作品のイメージが決められてしまい、それがひとり歩きをはじめのケースもある。本作品に「肉体の門」という衝撃的なタイトルが付けられたからこそ戦後史に名前が残るほどのブームが起ったのである。

別稿で私は、泰次郎が第二早稲田高等学院でフランス文学を学び始めた頃から早熟の天才レーモン・ラディゲを憧憬し、自分の小説のタイトルをラディゲの小説から借用して「肉体の悪魔」と決めたことを述べた。「肉体の悪魔」では現行形と自筆原稿との間でクライマックスに大きな異同があったのに比べて、「肉体の門」はそれらの間に目立った相異はなく、その他ストーリーに重大な変更が加えられた部分も見られない。だが泰次郎が十分に注意を払って推敲したと思われる二つの点をつぎに指摘しておこう。まず登場人物の「内部の生命」「内部の闘ひ」に関する描写である。泰次郎は意外にも「肉体文学」の評判を裏切るように人間の「内部」の描写に神経を集中している。たとえば伊吹新太郎が薄暗い地下室に潜り込んで私娼の若い女性たちと共同生活を始める場面である。やや長くなるがその部分を引用してみよう。

かうして、伊吹新太郎は、当分のあひだ、このうす暗い地下室で、彼女たちと起居をともにすることになった。拳銃の弾丸傷は、かすり傷であるが、右の腿の肉を鋭利なナイフかなにかでざくりとえぐりとつたやうになつてゐた。けれど、大陸の戦場で、胸に一回と、右上膊に一回貫通銃創を受けてゐる彼には、そんな傷など屁でもなかつた。二十日もじつと寝てゐれば、ひとりでに肉がもりあがつてきて、ほとんどよくなるにちがひない。前線の患者收容所の土壁の家の土間に、じつと動かずに寝てゐたことの経験によつて、彼はある期間さうしてゐさへすれば、人間の身体は自然に治癒するものであることを信じて疑はない。(この経験が、自分の肉体のねばり強さについての自信を、ほとんど彼の信念のやうにさせてゐる。経験からきた信念といふものは、なまやさしいものではない。伊吹には、自分の肉体のなかに存在する逞しい生命力が、はつきりと自覚出来た。彼には絶望がなかつた。絶えず、自分の内部から発する生命の息吹のままに、衝動のままに生きてゐた。こんなに明るくて、楽天的な男はめづらしい。)

右の引用のなかの括弧でくくられた部分が推敲のプロセスで加筆された部分である。どのような事件を起こして右の腿に拳銃の弾丸を受けたのか明らかにされてはいないが、戦火をくぐり抜け生き延びてきた伊吹は負傷しながらも「自分の肉体のな

かに存在する逞しい生命力」を自覚し、「自分の内部から発する生命の息吹のままに、衝動のままに生きて」いた。伊吹新太郎という名前は新しい生命の息吹を感じさせる彼のイメージに合致し、見事に名は体を表している。

また伊吹と密かに性関係を持った菊間町子が激しい嫉妬を浴びる場面でも、泰次郎は細心に推敲し、それが彼女たち私娼の「群れ」の「掟」を守るためよりも彼を独占したいという欲望の闘いであつたと説明している。

この場合、町子を憎み呪ふことの一、番烈しい者が、その生活秩序を一番愛し、そして伊吹を一番愛してゐることを、みんなに示すことになるのだつた。優占権をにぎる闘ひである。(町子のやり方に対する反抗は、表面では、みんなの共通の敵に対する協同の闘ひとしての形を取りながら、本当はさういふ内部の闘ひなのであつた。)

さらにこの直後にボルネオ・マヤが彼に無関心を示すようなことを口走り仲間を驚かせる。マヤの一見奇妙な名前は彼女の兄がボルネオで戦死し、それ以来ボルネオのことばかり話すので名付けられた。彼女が自分から身を引くようなことを話すのは、他の者の監視を弛めさせて自由な行動をしようというのではなく、マヤは「自分の心の内部で、あまりに大きくなつてきた伊吹の像と、闘つてゐる」のであつた。自筆原稿では最初こ

のような彼女の心理はつぎのように描写されていた。

マヤの場合は、ほかの者よりも、その考へが一層強かつたがために、マヤはその苦しさにたまらずに、心にもないことをいつて、自分自身をごま化さうとするのである。

しかしこれが斜線で消去され、現行形と同じ内容に修正されている。

伊吹新太郎の肉体の像に打ち負かされさうになるのを、必死にそれと闘ふために、自分からそんな心にもないことをいつて、自分自身をいやおうなしに伊吹から遠ざけようとするのだつた。

修正した後の表現を読めば、マヤの「内部の闘ひ」を一層緊張したものとして描こうとした泰次郎の意図が明白になる。自己の性を商品化した私娼の肉体を前面に据えて描こうとするのではなく、一人の男性をめぐって複数の女性が抱く嫉妬心を丹念に描き出そうとしているのである。これは肉体の解放を謳うドラマではなく内面が葛藤するドラマであるといえよう。その意味で青野季吉が「肉体の門」を評して「田村君の場合は、あれだけの作品でエロチシズムもなければ、デカダニズムもない」といったのは十分に首肯できる見解であつた(一)。

二

つぎに泰次郎が十分に注意を払つて推敲したと思われる二つ目の点を挙げよう。やはり小説でも舞台でも最も注目を浴びた結末のシーンで、「内部の闘ひ」に負け「群れ」の「掟」を破つて伊吹と性関係を持つてしまつたマヤが天井の鉄骨に宙吊りにされ、仲間からリンチを受ける描写である。自筆原稿では最初つぎのように書かれていた。

だんだんうすれていく意識のなかで、マヤは、いま「人間」として、生れつつあつた。

マヤの宙吊りの姿は、十字架上の予言者のやうに崇^マ敬^マであつた。

リンチを受けながらも伊吹との性交ではじめて性の喜びを感じたマヤが「人間」として再生しようとしている。しかし泰次郎はこれを推敲して、つぎのように加筆している。

だんだんうすれていく意識のなかで、マヤは、いま自分の新生がはじまりつつあるのを感じてゐた。

地下の闇に、宙吊りのボルネオ・マヤの肉体は、ほの白
い光りの暈につつまれて、十字架上の予言者のやうに壮嚴
だった。

殉教者のように半裸の女性が宙つりにされてリンチを受ける
という「肉体の門」の結末のシーンはジェームズ・ジョイス独
特の「エピフानी」(Epiphany)の方法、すなわち神聖で超
自然的存在による顕示に従って物事や事件、人物の本質が露わ
になる瞬間を象徴的にとらえるという描写に通じるものがある。
しかし十字架上の予言者を想わせるマヤの姿について考えてみ
れば、最初は肉体を商品化してただけの次元から、伊吹との
関係をめぐって性の悦楽を想い感じはじめ、最後は崇高なム
ドすら漂わせて象徴化された次元へと、変容していることが分
かる。そもそも性器そのものではなく性の持つイメージに対し
て性交が始められるように、そもそも(性欲動)(Tindo-Tiebe)
は(想像的なもの)(imaginaire)の機能にその中心が置かれて
いる。そしてそれが(象徴的なもの)(symbolique)の秩序に組
み込まれることで「主体」(Sujet)が成立し、性をコントロー
ルすることができるといえる。この意味からも右のマヤの描写は、緊縛
されて意識を失いかげながらも肉体を一つの対象物としてとら
えることのできる自己意識が目覚め、まさに彼女が人間として
新生しようとしている瞬間が象徴的に描き出されているといえ

る。実は「肉体の解放」というよりも「肉体からの解放」とい
う方が適切な場面である。伊藤整が「肉体の門」のリンチの場
面を評して「頹廢ではなく健康ですわ」といい、中野好夫が「頹
廢のイヤラシサ」ではなく「その反対の生命的な燃焼」が描か
れていると指摘したのも、そのためであつただろう(2)。

* * *

本稿執筆中の四月二〇日、丹羽文雄が亡くなった。享年一〇
〇。郷里が四日市であることや旧制三重県立富田中学校、早稲
田の卒業生であることなど泰次郎とは多くの共通点がある。同
郷の誼もあつて丹羽は文壇活動において泰次郎の庇護者をつと
めた。あまり知られていないが、本稿でも論じた泰次郎の「肉
体文学」の成立に、丹羽は一役買っている。「肉体の悪魔」は、
泰次郎が旅団司令部管外の街中にあつた公館で元中共軍の俘虜
である宣撫班員たちと一緒に起居していた頃のエピソードにも
とづいて創作されている。当時宣撫活動をしていた美術家の洲
之内徹とはそこで知り合つたのである。砲火の交わる前線を離
れ旅団本部附の勤務にならなければ、そのような体験はできな
かつたわけだが、泰次郎の転属を薦めたのは丹羽であつた。田
村泰次郎宛丹羽文雄書簡(一九四一年二月一三日付、三重県立
図書館所蔵)によれば、前夜に帝国ホテルで支那派遣軍報道部

長から陸軍報道部長へと昇進した馬淵報道部長の歓迎会が開かれた。わざわざ丹羽がそこに出かけて行き、田村の配属の件を彼に直接依頼したとある。ちなみに泰次郎は伍長には一九四三年八月一日任命され軍曹には四四年八月一日任命、そのまま敗戦を迎えている。

他方、泰次郎の名前を戦後史のなかに刻み込むことになった「肉体の門」は、丹羽が「群像」編集部員の窪田稻男に泰次郎を紹介し、彼が原稿を持ち込んだといういきさつがある。丹羽の仲介がなければ、日の目を見ないまま作品は埋もれてしまっただかも知れない。

このように丹羽は泰次郎の「肉体文学」の成立に大きな役割を果たしているのだが、さらにもう一つ、戦前のエピソードがある。一九四〇年一月に泰次郎は中国大陸に出征する。当時二九歳、日中戦争が泥沼化するなかで帰還できる保証はなく、戦死するかも知れない。『銃について』という作品集は彼の出征直前に出版の話がまとまり、翌四一年一月二〇日に高山書院から刊行された。同書には親友の石川達三と丹羽が序文を寄せてる。当時丹羽がどのように泰次郎を見ていたのかがよく分かるので、長文だが左に引用しておく。

田村泰次郎のこと

新庄嘉章が私信の中で、『今日貰った「文学者」の田村君の小

説（集団生活の一面）をよみ涙が出て仕様がなかった。軍隊の生活を経験してゐるせむかも分らないが、兎に角異様な気持の緊張をおぼえました」と書いてきたが、私もその小説を昨夜よんだばかりで、異様な感動がさめずにあつた時である。今までの田村泰次郎の小説におぼえなかつた新鮮な力のある感動であつた。田村は僅か三ヶ月軍隊にはいつてゐただけで、すでに三ヶ月以前の田村ではなくなつてゐた。いままた再応召をうけ、大陸に渡つた。新庄嘉章の手紙に、『再度の応召できつと立派な作家精神を鍛へられてくると思ひます。たのしみです』と書いてゐる如く、私もそれを期待してゐる。田村ならきつとそれをやりとげるであらう。「文学者」の小説には、今までの田村になかつた何か進むやうな、血走つた積極的なものが、気品たかく静かに包まれてゐる。

田村は三ヶ月の軍隊生活から出てくると、よく親しい友達をとらへて、「兵卒の心になれ」と極めつけてゐた。極めつけられた方では面喰つて、田村が大上段にかまへた口吻に反感を抱いたこともあつたが、田村としては、ごくあたりまえのことを言つてゐたにすぎない。それが今度の「集団生活の一面」で立派に裏書をしてゐる。

田村泰次郎は中学校から大学にいたるまで私の後輩である。

田村の父は私の中学校の校長であつた。伊勢の富田の人間であるが、父はたしか土佐人であると記憶してゐる。田村の関西人らしいその柔かな、人情にこまかな性格の中には、剛毅な土佐

人の気性も含まれてゐる。激情を少しも顔にあらはさずに、傲然勇猛なふるまひに出る田村の習性には、たんなる関西人だけでは片付けられないものがある。私は以前によく、「君は小説を書くときに、なぜあんなに行儀よくなるのだ？ 平常どほりにふるまつていいのだ」と言った。がこれは私の誤解であつた。

田村に平常の勇猛や太々しさの部分に多く気をひかれてゐた私は、それを彼の小説の中にも求めてゐたのだが、行儀のよい彼の小説は、彼の生れつきのよさから来る行儀のよさの現れに他ならなかつた。

田村の風貌には一見、太々しい性格的な感じをうける。がその一枚下には、女性的といひたいくらい緻密な、素直な性格を持つてゐる。友人間では、彼ほどのものにてれない男はないとされてゐる。が事實は、てれるほど、彼の性格は見栄坊でもなければ、虚勢を張つてゐるでもないのだ。李香蘭をひみきにしたり、原節子をひみきにしたりする場合、田村はしんからひみきにしてゐる。そはのものがてれくさくなるほど、ひたむきである。てれることが文学者の一つの才能のやうに心得てゐる多くの作家の中で、田村ほど素直な小説家はまためづらしい。

先に処女本「少女」が上梓されたとき私は感想文の中で、彼にそなはる色彩感のゆたかな点にふれた。また別なところで、彼の小説の品のよさにふれた。田村の小説の文章や行間からうける何ともいひやうのない気品は、決して後天的に作りだしたものでなく、もつて生れた秀れた素質である。それだけでも、

近頃の文壇に、悪達者な粗雑な小説の中では、すばらしく光つてゐる。

彼はまたどんなところに発表する小説にも、精魂こめて書いてゐる。彼ぐらい一つの小説に長い時間をかける作者は、今どき珍しい。結果は、やはり時間をかけただけのものになつてゐる。「銃について」を遺して出征する田村泰次郎は、その点、日本文学の通弊に災ひされることなく、自分の書きたいものだけを書きのこしていくといふ恵まれた位置にある。小説書くことをなりわいとすれば、時にはわが意に満たぬものも発表しなければならぬのだ。それを考へると、たとへ田村が再び私達のまへに現れないにしろ、思ひ出には何の後悔もない筈である。

田村は出征前友人に、これからの手紙はいちいち遺言のつもりで書いてよこす故、そのつもりで始末をしてほしいと言つてゐた。私たちはそのつもりで待つてゐる。彼の原稿に書く字は下手くそである。下手なりに、一字一字に力を入れて、押へつけるやうにして書く。万年筆の方で耐らないほどな力のはいつた文字である。が、今後の彼の手紙には、或はそんな力はいらない走り書も多くなることであらう。しかし何でもよい、私は彼からの手紙を待ちかねてゐる。

昭和一五年一月二日

丹羽文雄

丹羽は泰次郎の小説を「行儀のよい小説」と褒め、「何ともい

ひやうのない気品」を嗅ぎとっている。さらに「彼ぐらい一つの小説に長い時間をかける作者は、今どき珍しい」というのだが、戦後の濫作が知られているだけに丹羽の言葉は意外なものに感じられる。

丹羽の生家の崇願寺には、今も実弟の房雄氏が住職を務めておられる。地元新聞社の記者によれば、兄が逝去した朝は堂内に籠もって読経を続けていたという。以前、私も房雄氏から丹羽家のエピソードを拝聴したことがあるのだが、いかに深く兄を敬愛していたか、その想いがひしひしと感じられた。昭和文学史を支えた作家の逝去に私も謹んで瞑目したい。

註

本論文で引用した田村泰次郎の作品の本文は『田村泰次郎選集』全五巻（二〇〇五年四月二五日、日本図書センター）に拠っている。

(1) 青野季吉・伊藤整、中野好夫「創作合評会（2）」「群像」（一九四七年五月、五九頁）

(2) 同右、五八頁。

〔おにし・やすみつ 本学教員〕